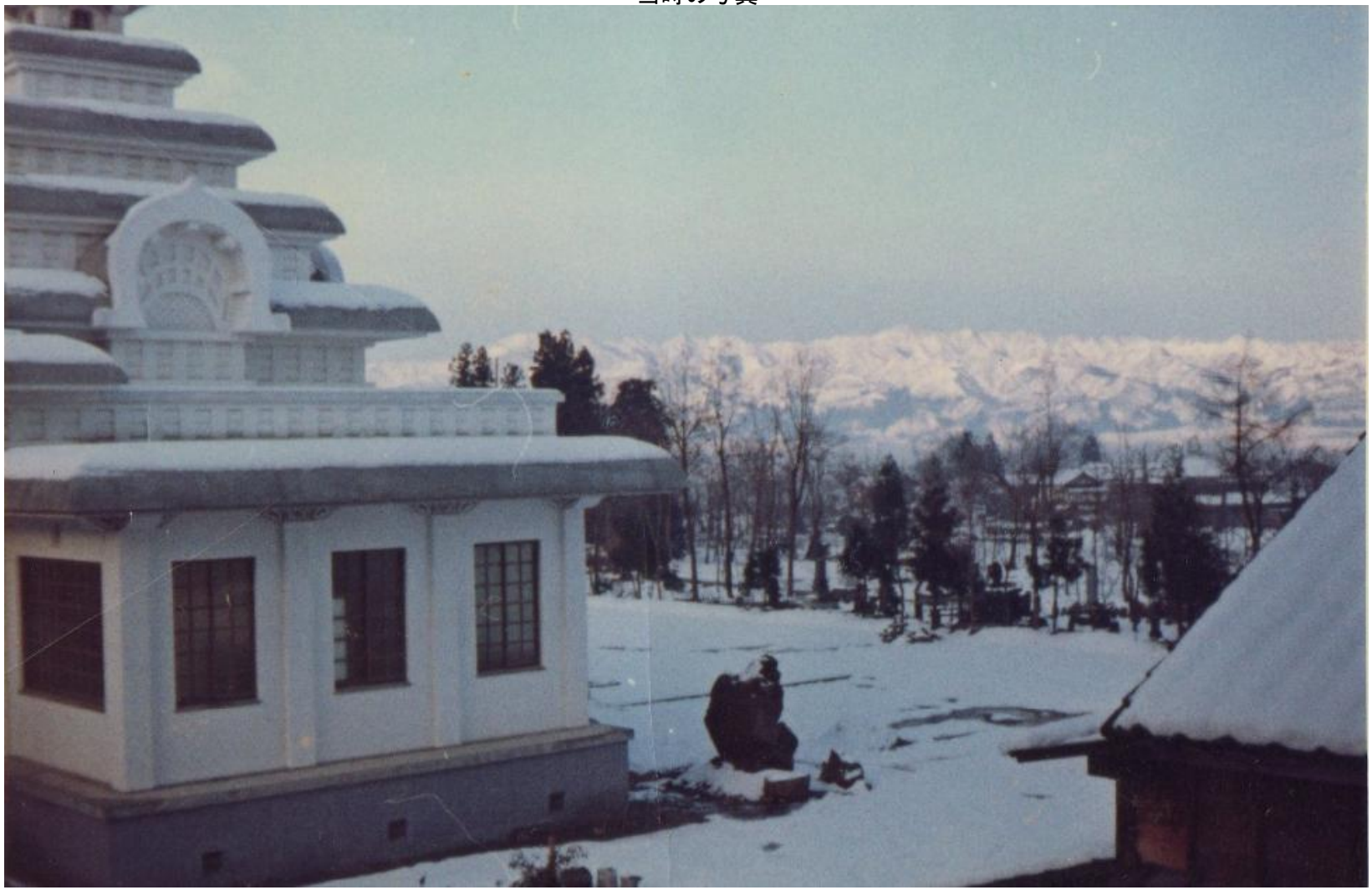
[龍谷寺観音堂]見学レポート

資料1　　当時の写真

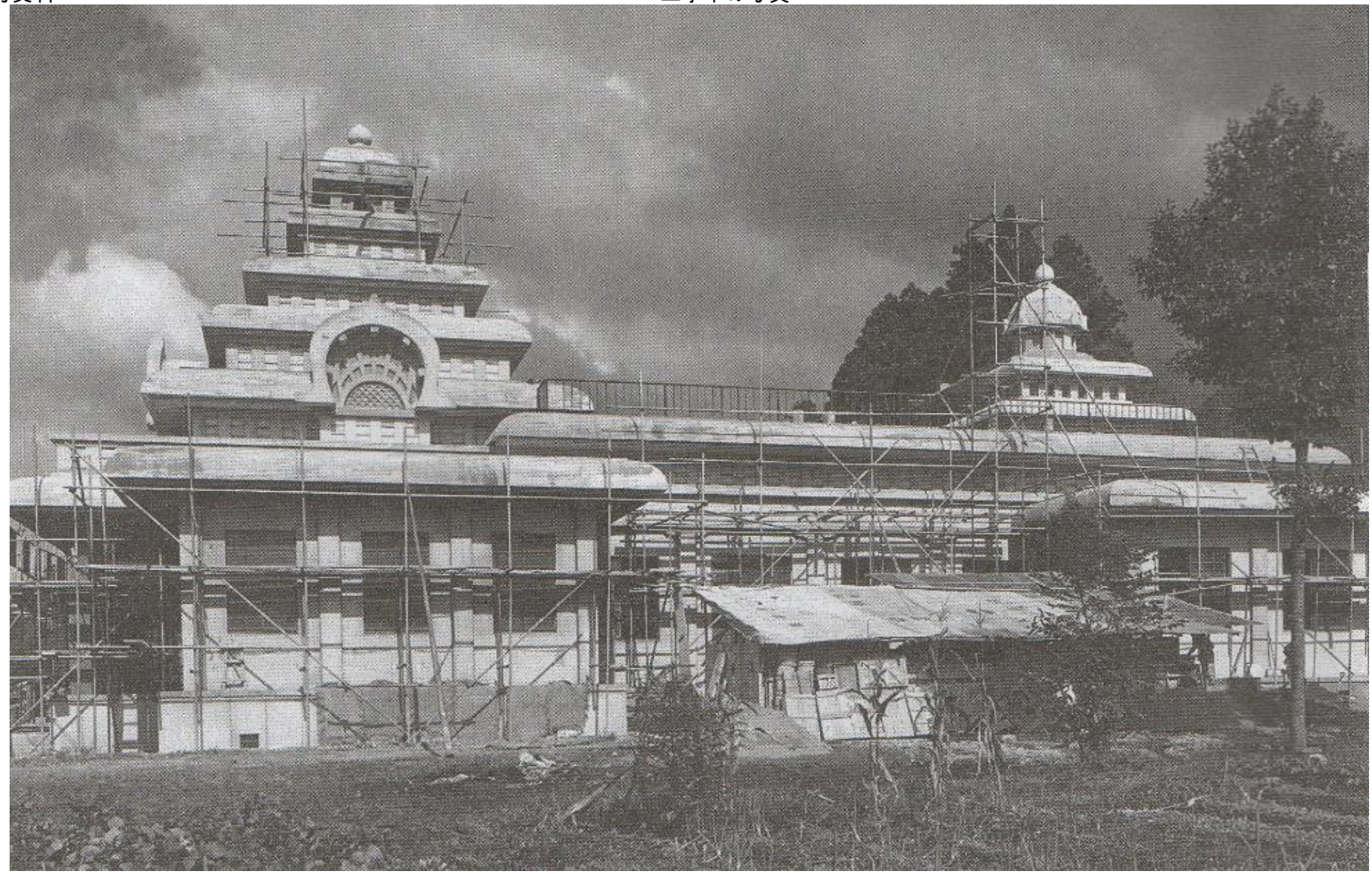
資料2

当時の写真



参考資料

工事中の写真



大岡實博士文庫書類資料目録Ⅱ（新築設計関連資料） 川崎市立日本民家園編より

上越新幹線浦佐駅から車で15分、前方に山門が見えてくる

「曹洞宗　八海山　龍谷寺」とある

前方は本堂

本堂/1750年頃の再建

屋根は豪雪地方特有の形という

本堂の右手には「大観音堂　慈雲閣」が見える

これが大岡實建築研究所設計の「龍谷寺観音堂」

龍谷寺のリーフではインドのグプタ朝様式と紹介されている

屋根は現設計ではケルビン防水モルタル塗りの上、セラスキン吹付仕上げとなっていたが、現在はカラーステンレス葺き（？）になっており、コーナーが立ち上がっているが、これは後の改修によるものと思われる

観音堂右手から後方を見る

右手側面

右手後方から全面を見る

右手後方から全面を見る

背面

背面

背面

斗栱の抽象化

入隅部分

出隅部分

「設計は建築史の泰斗故大岡実東大教授（国宝審査委員長）」とある

龍谷寺の歴史

十一世紀の半ば、陸奥の安倍氏討伐のため鎮守府大将軍に任ぜられた源阿臣頼義公が東国で兵をまとめ陸奥国に下向したことは、「前九年の役」としてよく知られておりますが、その軍勢がこの大崎村で猛吹雪のため遭難し千余の凍死者を出したこと、そしてこれが雪害の記録として日本最古であることは、あまり知られていないようです。

この事件は、龍谷寺にとって本尊阿弥陀如来（成仏の弥陀）の由来譚として、その歴史を語るときには忘れてはならない事柄なのです。すなわち、吹雪の中で凍死した将兵の菩提を弔うために、大将軍頼義公が、永承五年（1050）に当寺に佛像を寄進なされました。そしてこの佛像こそが龍谷寺の本尊様なのです。このお像は平安時代の代表的な佛師定朝大法印の作で木心乾漆切金の平安佛として知られております。このころ龍谷寺は現在地の南、遭難の場所を一望に見渡す堂平の高台にあり「龍の口龍谷寺」と称しておりました。

当時の佛教は神道・陰陽道・神仙道等との習合を深め、寺院を山地に建立し、山岳を修行の道場とするようになり、山岳宗教といわれる色彩を強めておりました。こういう中で八海山を修行の道場として創建されたのが龍の口六萬寺という天台宗の寺でした。ここを根拠に多くの行者が峰入り修行に励んでいたと伝えられております。そしてこの六萬寺は後に真言宗に改め二十二代の法灯を伝えました。

下って大永三年（1523）天慶宗積禅師が上州より来越し、六萬寺を禅宗寺院として復興し名称も「龍の口龍谷寺」と改め、以降曹洞宗の寺院となりました。その後暫く堂平にあった寺は、惜しくも雪崩のため倒壊してしまい、慶長年間に現在の地に移りました。この地は南北朝の時代、南朝方の豪族「大崎九郎右衛門」の居館跡で、百間四方一万坪の敷地に、大崎氏の内鎮守であった八海山を祭る石宮を中心に伽藍をかまえました。ちなみに「大崎九郎右衛門」はそれ以前、南北朝の争いに敗れ、上州に敗走しておりました。先年境内の地下二メートルで切石をしきつめたところがみつかり、以前に大きな建造物があったことがうかがわれました。この移転を機に「龍の口」を改め、現在の「八海山龍谷寺」という名称が使われるようになりました。

そのほか、昔を伝えるものとして親王塚と梵字碑などがあります。「親王塚」は後醍醐天皇の第二皇子「宗良親王」の墓所と伝えられております。宗良親王は有名な歌人であるとともに天台座主に任ぜられた宗教者でもありましたが、南北朝の動乱にあって父後醍醐天皇を助け各地を転戦し、越後で最期を迎えたと伝えられる悲劇の人です。また当寺に五十基ほど保管してある「梵字碑」は、南北朝時代の庶民の墓石です。これは自然石に佛様の種字を刻んで墓石としたもので、中には石面に親の菩提を願う孝子の赤心が綴られているものあります。形式や分布の特殊性からこれらは特に「魚沼梵字碑」と命名登録され、民俗学の貴重な資料として、大切な文化財として著名です。またこれらの梵字碑の中には南朝の年号を刻んだものがあり、大崎氏のもと南朝に与した大崎の歴史を垣間みることができます。

以来龍谷寺は、檀信徒住僧の努力で江戸中期宝暦年間に現在の本堂を建立し、山門・坐禅堂・衆寮等が整備され、十万石の寺格を付与されるなど、当地域の中心寺院として活動を続けてきました。しかし明治初頭の政治的大変動のなかで、大きく伽藍を縮小しました。

大正期より三代に渡り海外布教特にハワイの日本人移民の開教に従事し、中にはホワイトハウスでの曹洞宗管長新井石禅禅師と米国ハーディング大統領との公式会見に陪席した住職もありました。これが日本人と米国大統領との最初の接見です。

終戦後、ハワイの日系移民の間で、世界平和と祖国日本の復興を祈願して観音様の建立が発願され、昭和二十八年に至り十一面観世音菩薩像が完成し、龍谷寺において開眼の運びとなりました。この尊像は、新潟県村上市出身の故山脇敏男先生です。次いで昭和四十年には、観音様を安置する観音堂「慈雲閣」が落慶しました。この建物はインドのグプタ朝時代の建築様式に範を取り、およそ千五百年ほど前のインドでも佛教の盛んな頃の佛塔を手本としたものです。設計は建築史の泰斗故大岡実東大教授（国宝審査委員長）で、佛教の更なる興隆と観音様の教えの弘通をねがって建立されました。

また昭和五十年、佛縁あって竹内勝山先生作の佛像壱百余体を龍谷寺にて奉安いたす事となり、昭和五十四年に妙光堂が落慶しました。このお堂におまつりする佛像は、如来・佛・菩薩・明王・天部など十三佛・十二支の守り本尊等々お名前を耳にしたことのある佛像はほとんど安置されており、厄払いのお堂として参拝者を集めています。

100820（1000）

〒九四九七二五一　新潟県南魚沼市大崎三四五五
曹洞宗　八海山　龍　谷　寺
電　話　〇二五七七九二〇二〇
電　送　〇二五七七九二四七七

↑

龍谷寺のリーフより

当初の屋根はこの写真の通りで、現在の屋根は豪雪地帯ゆえの雨漏りのため、新たに銅板（カラーステンレスか？）が被せられてコーナーは立ち上がりのある形となっていて、当初のイメージとは若干違ってしまっている

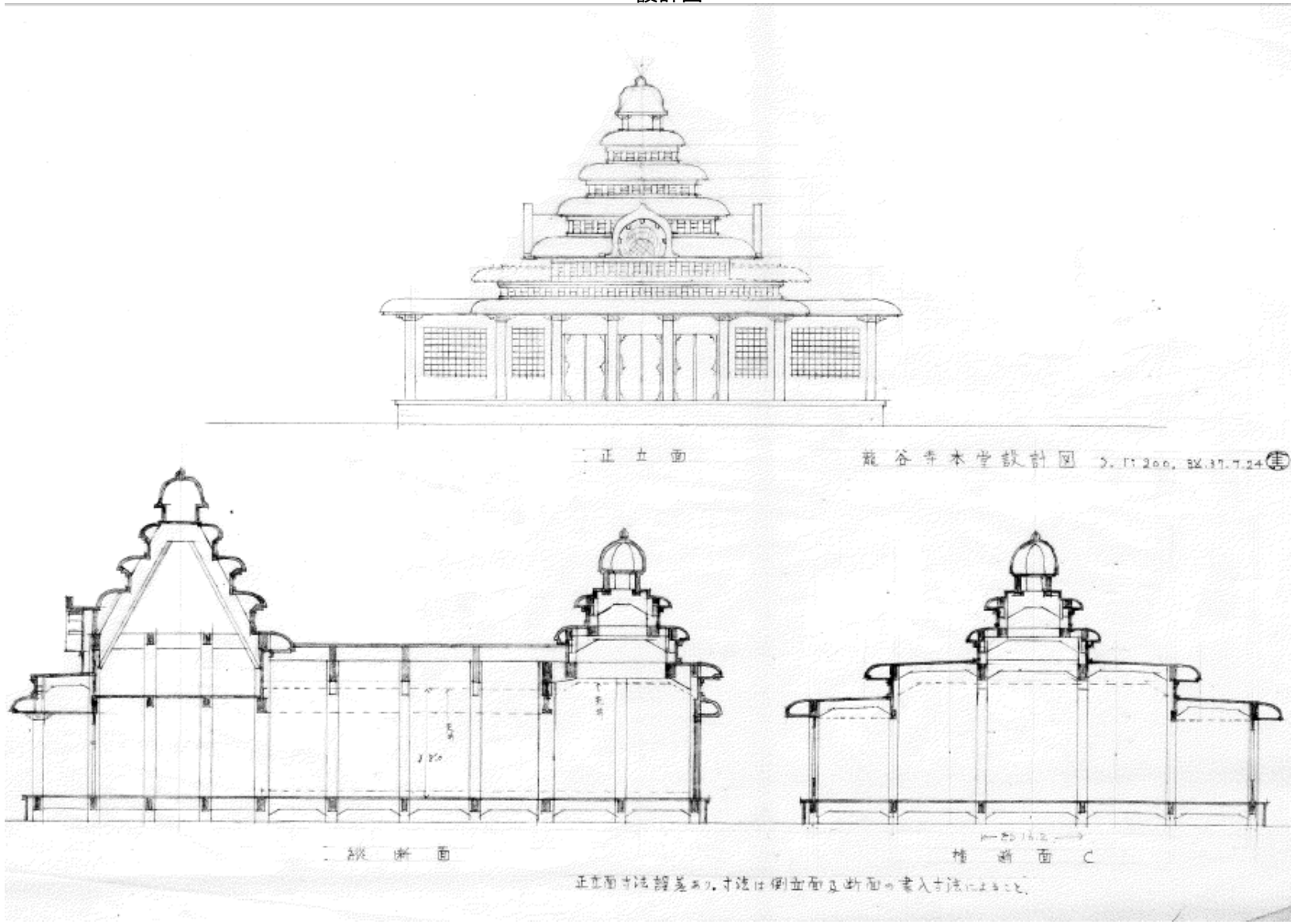
龍谷寺の絵葉書より

仕様書によると「屋根は鉄筋コンクリートスラブ下地にケルビン防水モルタル塗り、但し搭屋は防水モルタル刷毛引の上セラスキン吹付」となっている

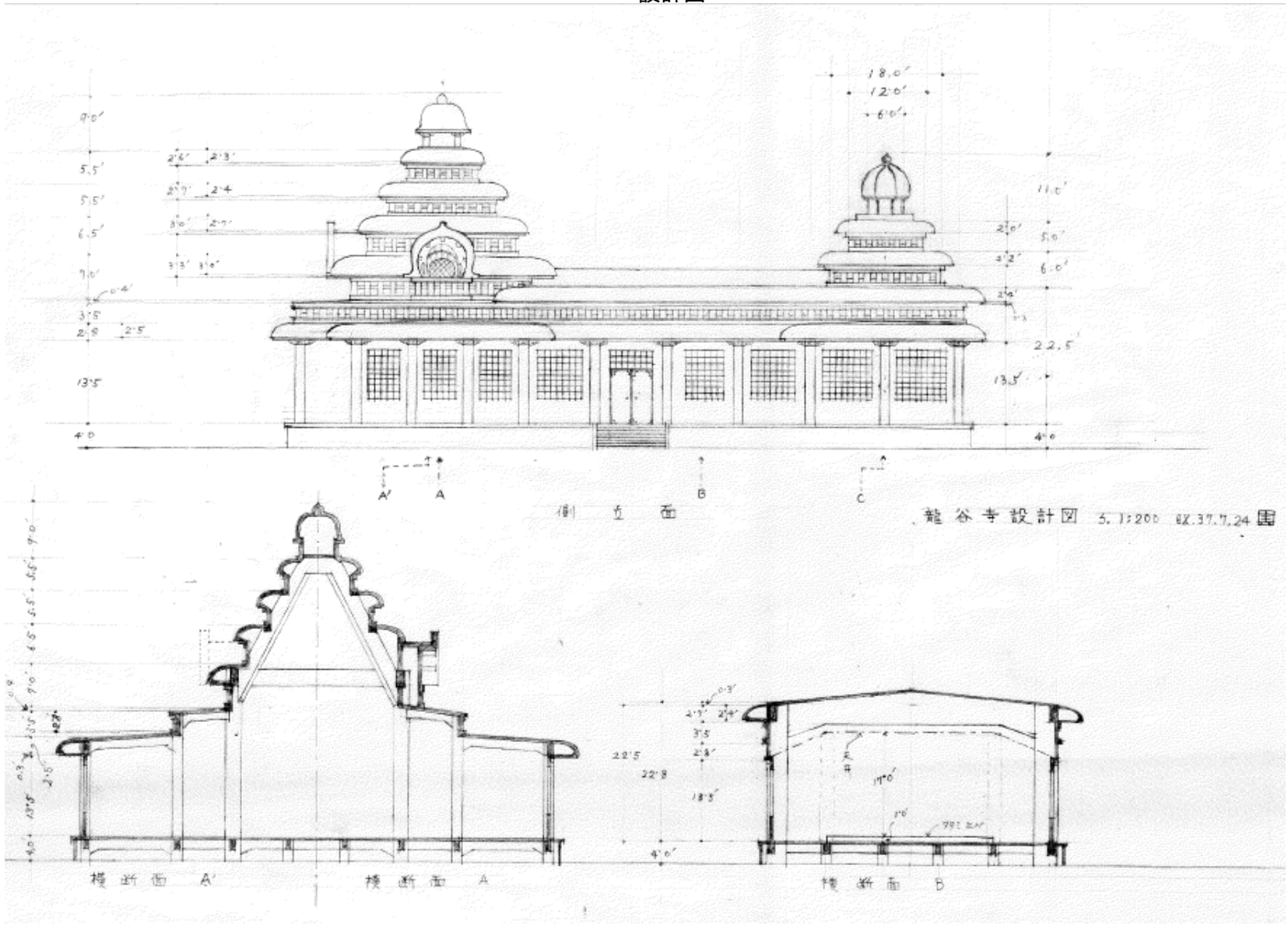
雪は多い時は2メートルも積もるという

龍谷寺の絵葉書より

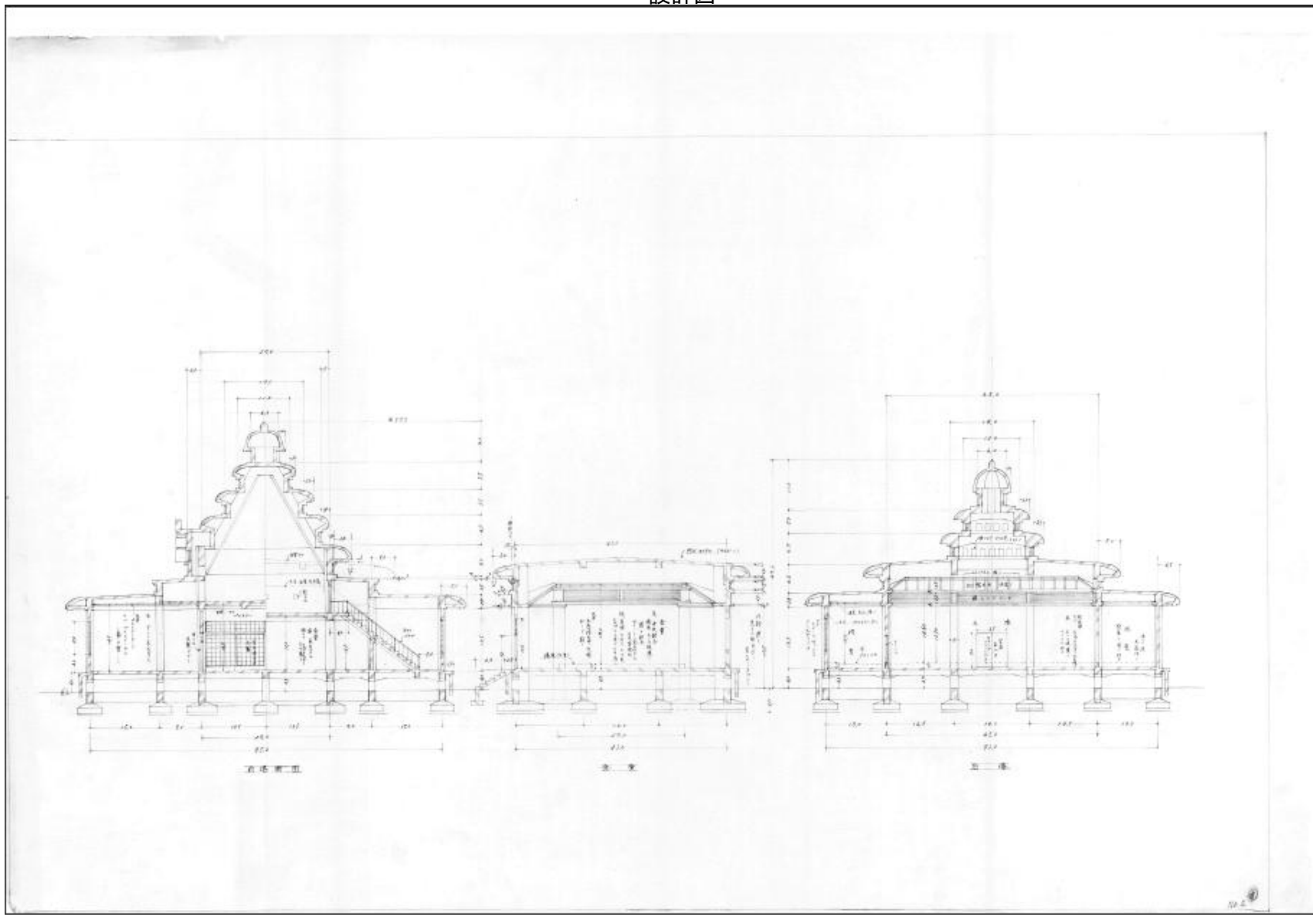
設計図


正立面
龍谷寺本堂設計図 S.1:200. 昭.37.7.24
縦断面
横断面 C
正立面寸法誤差あり. 寸法は側立面及断面の書入寸法によること.

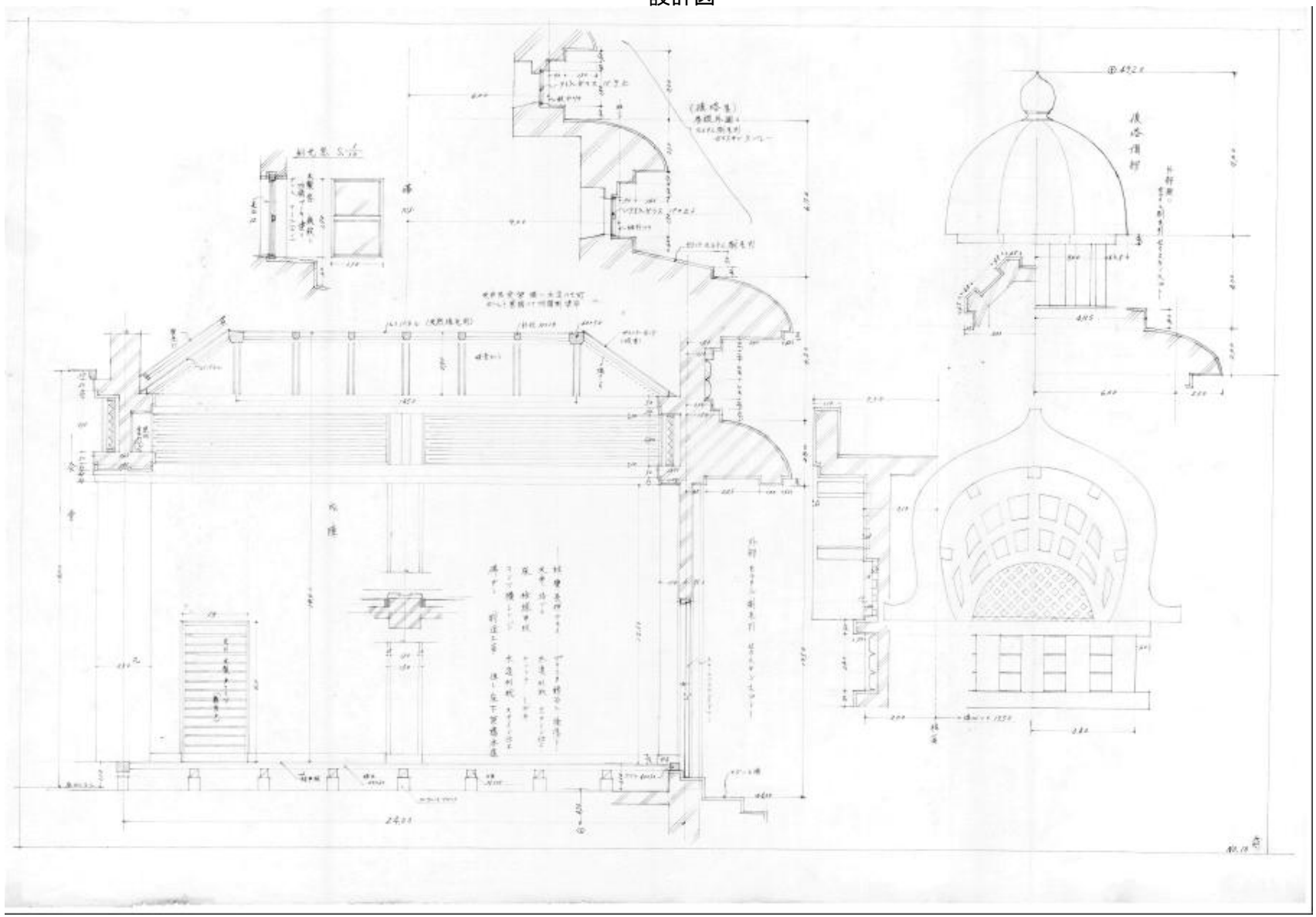
設計図



設計図



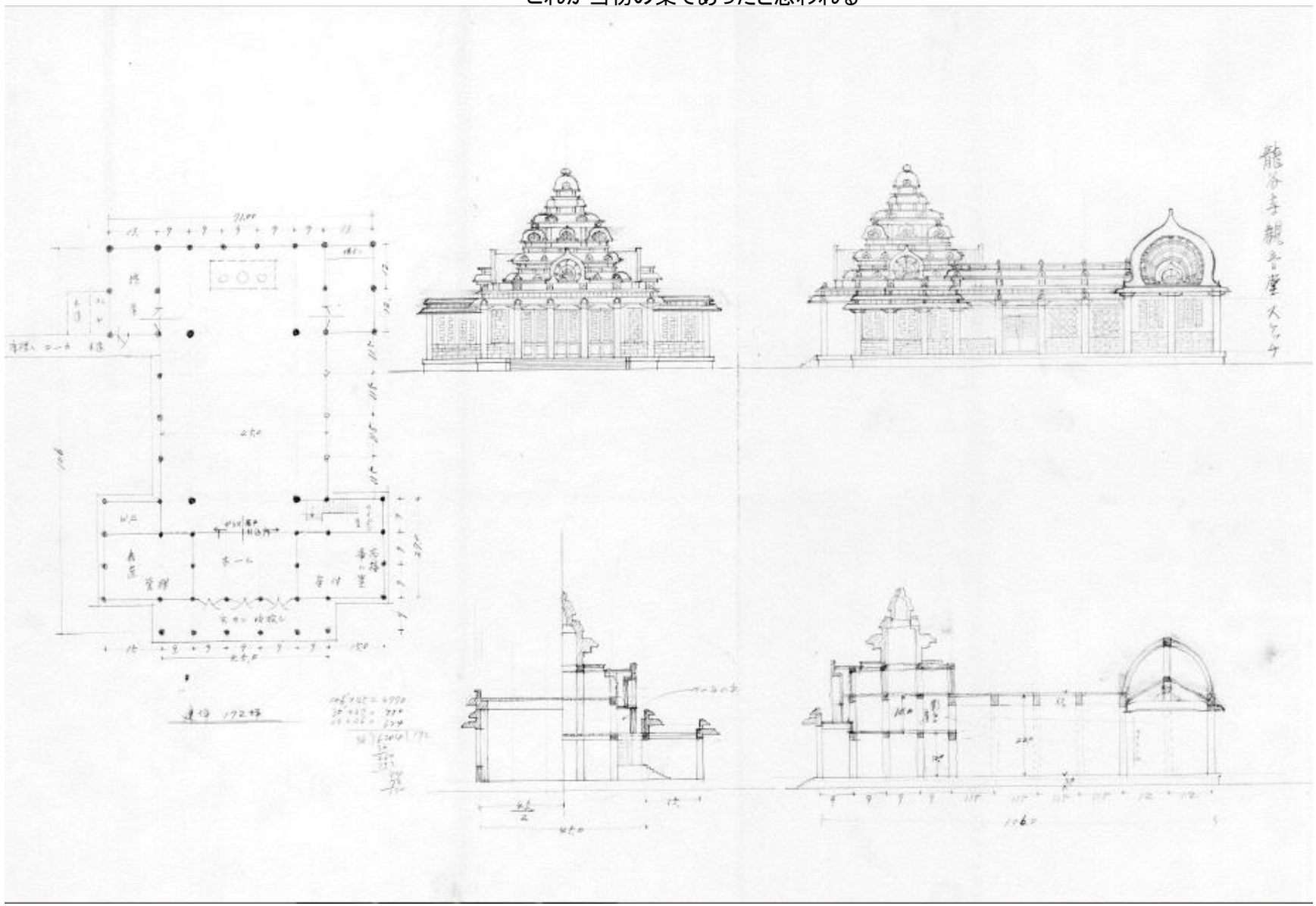
設計図

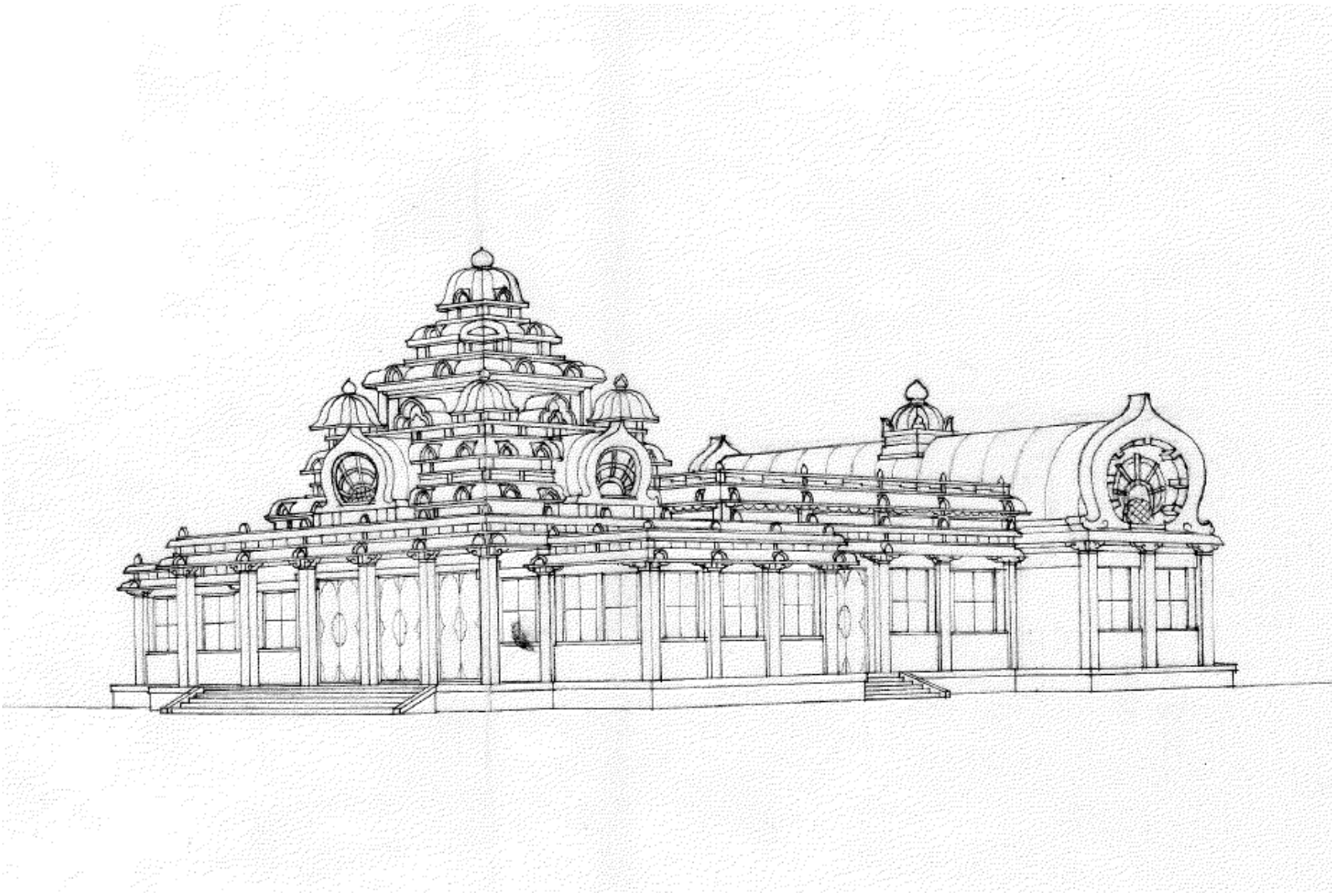


龍谷寺の羅漢堂に大変貴重な当時の模型が置かれていた

後方の屋根は実際の建物とは違う形となっている

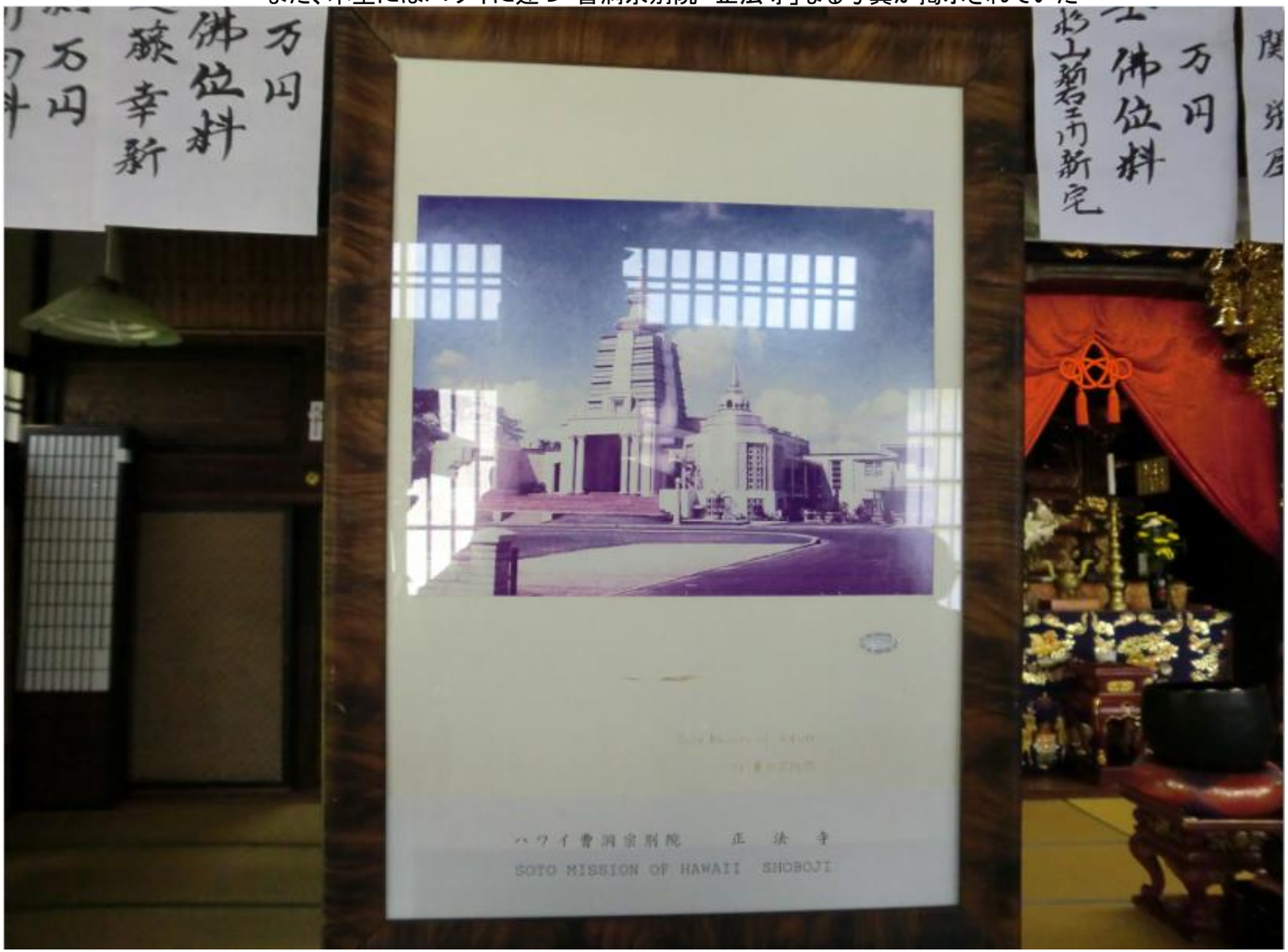
これが当初の案であったと思われる





龍谷寺観音堂姿図

また、本堂にはハワイに建つ「曹洞宗別院　正法寺」なる写真が掲示されていた



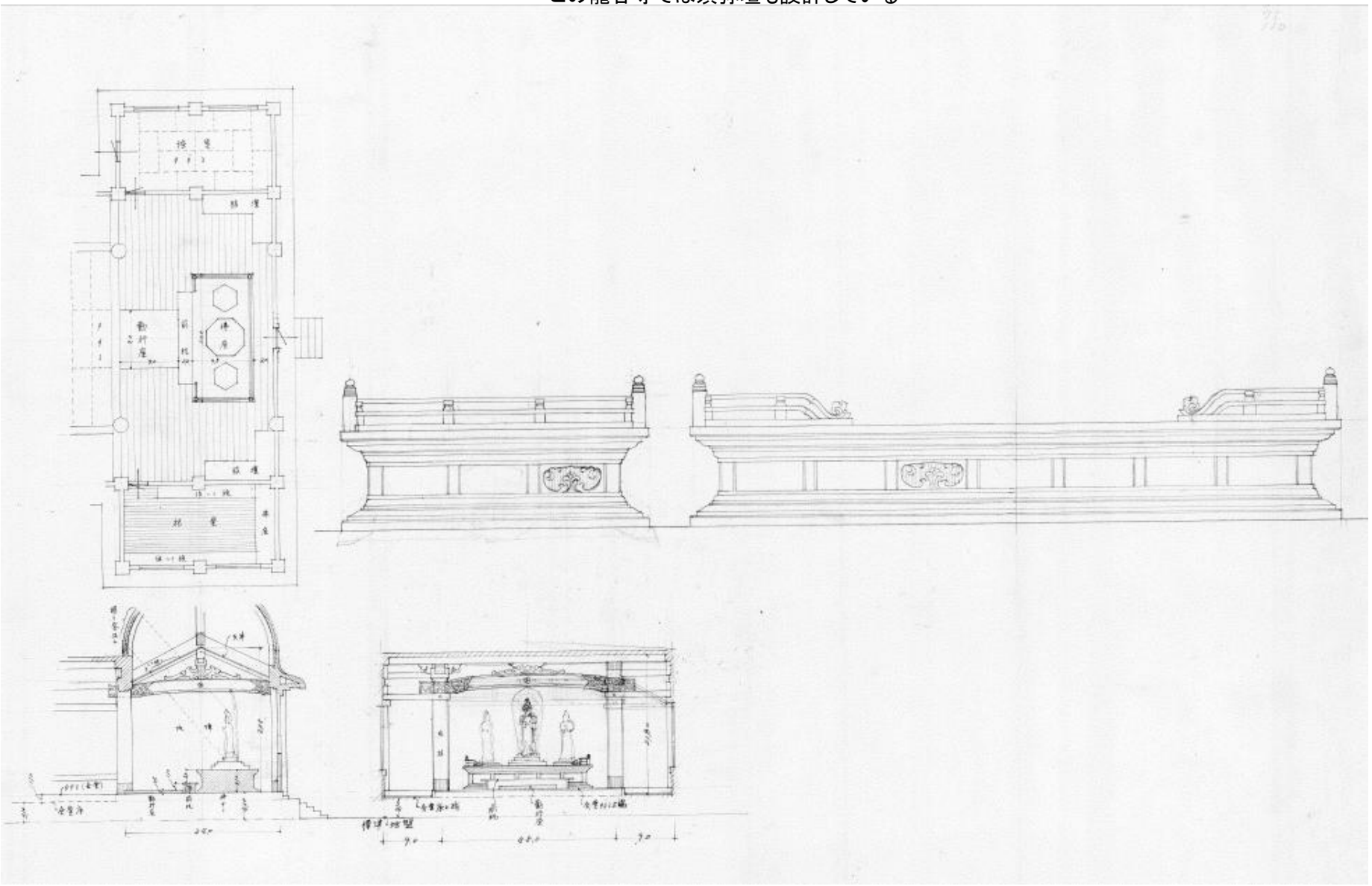
龍谷寺リーフレットにあるように、歴代の龍谷寺住職がハワイの日本人移民の開教に従事した縁により、ハワイの日系移民の発願があってこの観音堂建立の運びとなった。その際にこの正法寺のイメージがあり、また築地本願寺のデザインに惹かれて、伊東忠太の愛弟子で上記のような実績のある大岡先生に依頼があったようである。（現住職の奥さんからの聞き取り調査より）

参考

築地本願寺/設計:伊東忠太

参考

この龍谷寺では須弥壇も設計している



さて、他の建物も見てみよう

本堂（赤い屋根）の右手は庫裡、その右手に観音堂が見える

龍谷寺の絵葉書より

龍谷寺の絵葉書より

現在の本堂の屋根は改修され、ご覧のようになっている

本堂の屋根/再建当初は茅葺きであったものを金属板に変えたために垂木の先はご覧のような体裁となったと思われる

前方は庫裡

斗栱は繰り形の付いた大斗肘木

金の大

本堂内部

この欄間は室町期のものだという/作者不詳

これらの彫刻欄間は石川雲蝶の作という

斬新な形の持ち送り

門波太古風

庫裡

庫裡

鐘楼

鐘楼

鐘楼

鈴木洵氏設計の妙光堂/昭和54年竣工

内部には武山勝山師の仏像が所狭しと並んでいる

山門

流芳

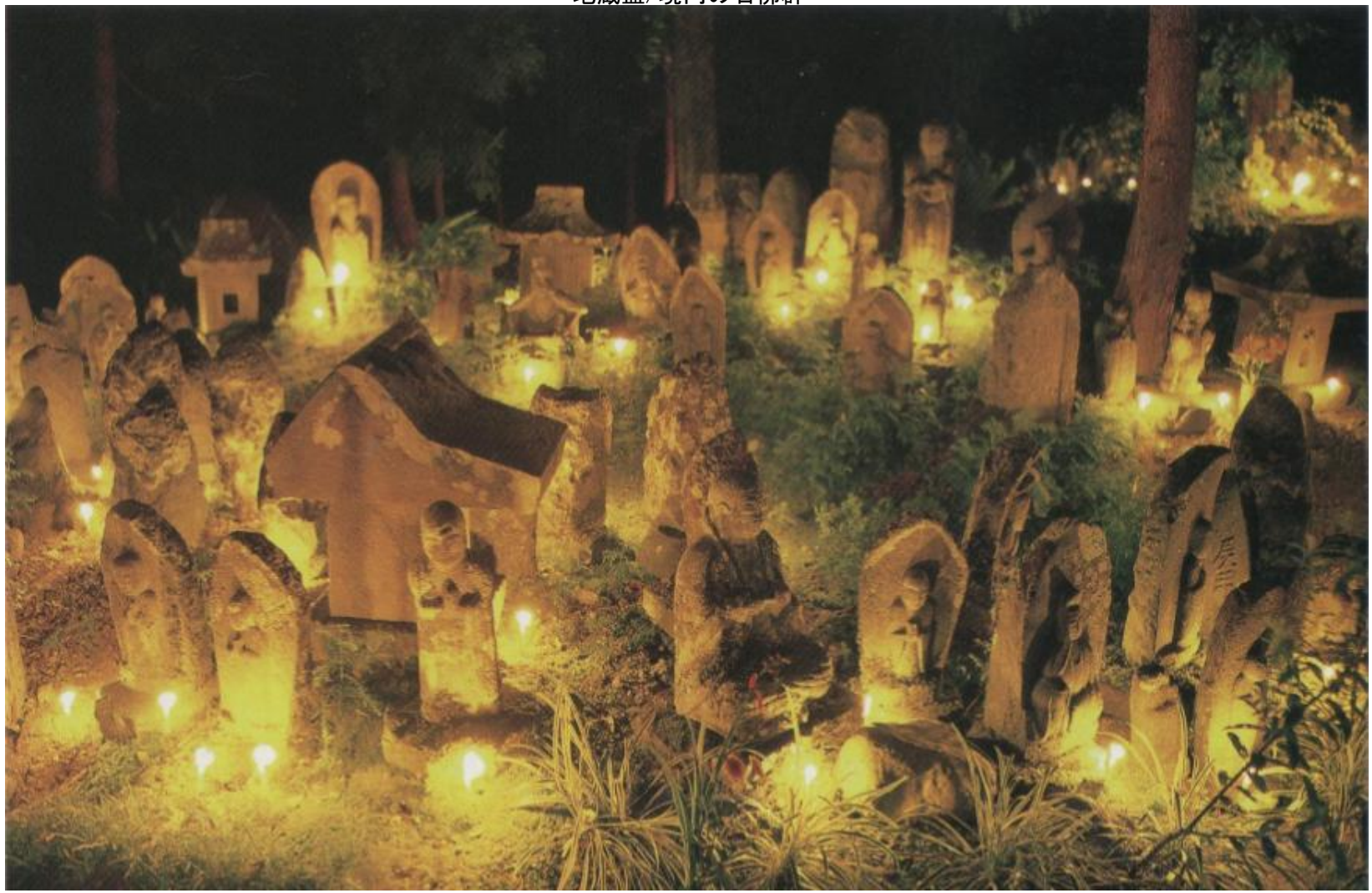
萬靈塔

境内側より

「魚沼梵字碑」と呼ばれる古碑郡/南北朝時代の庶民の墓石

佛様の種字が刻まれている

地蔵盆/境内の石佛群



龍谷寺の絵葉書より

こんな石造物もあった

累代墓

こんな石造供養塔もあった

立派な宝篋印塔

中部北陸自然歩道
八海山 龍谷寺
龍谷寺は一千余年前に創建された寺院です。平安中期奥羽で安倍氏の反乱（前九年の役）がおこり、討伐にむかう軍勢が猛吹雪により大崎の地で遭難し千余名の犠牲者をだしました。当寺はこれら凍死した将兵の供養のため、将軍 源 頼義公が寄進された阿弥陀如来をご本尊としています。そのころ伽藍は堂平山の中腹にありましたが、五百年ほど前にこの地に移りました。
インド様式の白い観音堂には、世界の平和と戦後の祖国復興を願ってハワイ日系人の浄財により建立された十一面観世音菩薩が奉安されています。そのほか、南北朝時代の「親王塚」・「梵字碑」などが昔を伝えています。
また「妙光堂」には数多くの佛像が奉安されて、厄払いのお堂として参拝者を集めています。
環境省・新潟県

年月	西暦	工事名		所在地		工事期間	助手	構造設計	施工	構造種別
昭和37.12	1962	龍谷寺	観音堂	新潟県	大和町	昭和37.12～39.04	松浦弘二	国建築事務所	大成建設	RC造